

巻 頭 言

『異文化経営研究』第8号発刊にあたって

『異文化経営研究』(Transcultural Management Review) 第8号を発行することができ、ありがたい限りである。執筆者や編集者をはじめ、発行に至るまで多くの方々に尽力いただいた。心より御礼を申し上げたい。今後、ますます充実した学会誌にするために、巻末に記す投稿規定や執筆要項に従って、会員の皆さんにふるって投稿していただきたい。

さて、本学会設立9年目に当たる2011年は激動の年であった。3月の研究会は大震災と原発事故の影響で、開催を断念せざるを得なかった。その後、7月と11月の研究会は予定通り行なうことができ、安堵した。これまで当たり前のように主宰していた学会の運営であったが、それは、多くの方々の努力の賜物であり、さらには自然災害などがないことが条件であったことを思い知らされた。学会活動を継続できること自体が幸運であることを再認識した次第である。このように、災害は悲痛な経験であるが、自分を振り返る絶好の機会でもあった。さらにもうひとつの気づきは、海外とのつながりである。3・11後の世界各国からの支援の手、また個人的にも世界中の友人知人たちからのメールの数々に、日本と世界がつながっていると痛感した。また、日本人の美德を再認識したことも感謝であった。

このような中、浮かび上がってきたことは、日本におけるリーダーシップの欠如である。日本では、エリートという言葉はタブーに近くなって久しいが、今一度、その必然性を考えたい。個人的な話で恐縮だが、筆者には数十年来の親友がフランスにいる。その人は、学生時代にクリスマスに行く当てがなく途方にくれていた留学生であった筆者を自宅に招いてくれた伯爵令嬢である。裁判官を目指していた聡明な彼女は、困った人がいるならその人を助けるのが当然だと言った。その後、自分の使命は祈りにあるとの啓示により、修道女となり、以来、人類と世界の平和のため、祈り続けている。まさにノブレス・オブリージュを体現したような人物である。

自分を厳しく律し、人の心の痛みをわかることができる人、そして必要な行動を自分の判断で迅速に行なうことができる人。これが真のエリートであり、リーダーではないだろうか。そのような人こそ、どのような異文化の環境にあっても、尊敬される人物となろう。日本に必要不可欠な人材はこのような人ではないだろうか。

人生、それは「人との出会い」である。異文化経営学会でも実にいろいろな出会いがある。人と人との結びつきによって、プラスのエネルギーが生まれ、よりよい世界の実現につながっていければ、と切に願っている。今後ともご支援を賜りたく、お願い申し上げます。次第である。

2011年12月

異文化経営学会 会長
馬 越 恵 美 子